－所蔵作品紹介－

上野　憲男　UENO Norio

海流

かいりゅう

作品データはこちら

上野憲男は北海道北部の海沿いの街、天塩町に生まれ、少年期を札幌で過ごした。画家を志して上京し、1952年自由美術展に初入選する。1956年の「世界・今日の美術」展を機にアンフォルメルの嵐が吹き荒れると、若き上野もそこに飛び込んで行った。1962年には北海道出身の抽象画家グループ「北象会」結成に参加。その頃にはアンフォルメルの嵐も治まりつつあったが、上野は嵐の跡を耕し直し、嵐が運んできた種子を育てるようにして自らの絵画を探っていく。種子とは絵具を盛り上げて作るマティエールと、制作にあたって意志の制御をはずそうとするオートマティスムであった。彼はマティエールを整理し、オートマティスムを即興性へとシフトしていく。そして耕し直すとは、アンフォルメル絵画があらわにした物質としての画面に、青や水色の色調の広がりを武器にして漠たる空間と透明な叙情を与えていくことだった。

こうした造形上の探求は自らの内的ヴィジョンに確かな形を与えることを目指していたわけだが、その歩みの中で彼が掘り当てた北海道の自然、特に雪が降る前の空や手塩の海といった固定した形をもたない色彩空間であった。かつてそこに「なにかの予兆」を感じた少年だった上野は今、その記憶を忘れ得ない画家である自らを発見したのである。

そんな自然現象を意識したタイトルは1980年代を過ぎると目立つようになっており、ここにあげた〈海流〉もその１点である。近年では大気、惑星、種子などのタイトルが付けられており、そのヴィジョンはマクロとミクロの世界を自在に往還してやむことがない。

*引用は上野憲男東京個展評（『北海道新聞』1985年５月31日夕刊）

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より